

南琉球・宮古伊良部島にみる無アクセント方言のイントネーション

永野マドセン, 泰子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

43

(発行年 / Year)

2013-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012502>

南琉球・宮古伊良部島にみる無アクセント方言の イントネーション

永野マドセン泰子

キーワード

宮古伊良部島方言、無アクセント、イントネーション、モダリティ、統語構造、フォーカス

要旨

宮古伊良部島にみられる無アクセント方言のイントネーションを、モダリティ、統語構造、およびフォーカスとの対応において分析した。この方言の基本イントネーション単位は「へ」の字型のピッチパターンで、この繰り返しと句末の卓立イントネーションおよびポーズで、イントネーション形状が分析できる。韻律単位としては冒頭にピッチの上昇を伴うアクセント句と上層単位のイントネーション句の二つを認め、モダリティはイントネーション句の右端に現れる。疑問法は急激なピッチの下降およびフレーズ全体の高いピッチで発話される。左枝分かれ、右枝分かれの統語構造は東京語などと同様、イントネーション句の数の差異として表現される。フォーカスはアクセント句末に付加する係助詞が卓立のイントネーションとして発話されポーズが挿入されるが、ピッチ領域全体を拡張したり、抑制したりする現象はみられない。

1. はじめに

伊良部島方言のアクセントについては「無アクセント」(平山 1964)の他にも「一型アクセント」(平山他 1966)、フット構造をもつ高低の音調交替でアクセントよりはリズム」(下地 2008a)という異なる見解が提示されている。また『日本列島のイントネーション資料、琉球列島の部』では、伊良部島方言ではないものの、同じ宮古島方言であり地理的にも文化的にも近い平良市方言について「アクセント型を有しない」「無型アクセント」と中本(1992)が定義し、アクセント型を有する那覇市方言と比較している。なお、「一型アクセント」は宮崎県や鹿児島県の一部でみられる文節の最後の拍が常にあがるようなタイプのアクセントで無アクセント方言との違いは、後者では話者にアクセントの型の意識がない点とされている。本稿の調査録音に協力してくれた伊良部島方言(伊良部・仲地)の話者T氏は『宮古伊良部島方言辞典』(沖縄タイムスより刊行予定)の著者であり、当該方言に対する深い造詣をもつ方であるが、いくつかのアクセント項目についての聞き取りの結果、氏にははっきりとしたアクセントの型も意識もなかったため、ここでは無アクセント方言と定義した。無アクセント方言や言語についての包括的な研究は世界的にみても

まだ極めて少なく、日本語における先行研究はすべて本土の無アクセント方言に関するものである。

本稿では伊良部島にみる無アクセント方言について3節で基本イントネーション単位を定め、4節で「モダリティ」、5節で「統語構造」、6節で「フォーカス」とイントネーションの対応を分析する。同時に、ほぼ同一調査項目を用いて調べた首里方言のイントネーション (Nagano-Madsen 2011) との差異についても言及し、7節では簡単なまとめを提示する。

2. 調査項目、話者、録音、音響分析

録音項目は「モダリティ」「統語構造」「フォーカス」の項目を立て、首里方言のイントネーション (Nagano-Madsen 2011) で使用されたものを土台に、下地 (2008b) に見る構文例のいくつかについても録音した。

録音者は自他共に認める典型的な伊良部島方言話者のT氏 (昭和4年生まれ) で、厳密には「伊良部・仲地方言」の話者である。発話に個別的特徴がある可能性は排除できないが、典型的な単一話者を選んで分析をはじめめる事は、先行研究の少ない方言や言語におけるイントネーション記述によく用いられる手法である。

調査は2010年7月と2011年8月の2回に分けて、話者の自宅で行われた。まず標準語で作成した調査項目について、当該方言での表現を確認した後録音という手順を取った。録音にあたっては、MicroTrack 24/96デジタルレコーダー、また音響分析にはPRAATおよび杉 SUGI SpeechAnalyzerを用いた。本稿における図はすべて、SUGI SpeechAnalyzerを用いて作成した。

3. 基本イントネーション単位

伊良部島方言の発話では通常、発話冒頭にピッチの上昇がみられる。この上昇のタイプであるが、筆者の手元にある他方言のものと比較すると、東京語、高知方言 (関西アクセント圏)、首里方言など「下げ核」の有核型と無核型 (平板型) の対立のある方言における平板型の語を含むアクセント句の特徴に近い。対して現在筆者が準備中の「昇り核」を基本とする琉球今帰仁方言のイントネーションでは、発話の冒頭に規則的なピッチの「下降」が観察され、それがこの方言におけるアクセント句境界である可能性が高い。今帰仁方言にもHL型の語があるがこれにはアクセント核がなく、そのイントネーションでは冒頭のピッチの上昇が欠如しているか、HLのおよその位置までピッチが上昇していく。

伊良部島の無アクセント方言にはアクセントが欠如しているが、フレーズ頭に規則的なピッチの上昇がみられることから、本稿では、このピッチ形状を当該方言の基本イントネーション単位とみなし「アクセント句」と呼ぶ。これはPierrehumbert and Beckman (1988) およびVenditti (2005) の定義に従うものである。ピッチの上昇ではじまりゆるやかに下

降するピッチ形状はまた藤崎モデル（藤崎・須藤 1971）にみる「へ」の字型のフレーズ成分にも似ている。アクセント句は通常「文節」に対応する事が多いが、統語構造やフォーカスによりアクセントが実現されない場合には、文節より大きな単位に対応する事になる。アクセント句の上層韻律単位を「イントネーション句」と定義するが、名称はVenditti (2005) に従うものである。イントネーション句はその内部にアクセント句をいくつか含む単位であり、ダウンステップの範囲でもある。イントネーション句の境界ではピッチのリセットが行われる。

日本語における無アクセント方言の先行研究をみると、基本イントネーション単位の形状は一定でないことがわかる。福井では基本的に「低く平ら」なイントネーション成分であるが、熊本方言では発話冒頭から韻律境界までピッチが上昇を続けた後、急激に下降するという形状が観察されている。しかしいずれの方言も統語情報などによる局所的な卓立のイントネーションが付加する（前川 1990、1992）。

伊良部島の無アクセント方言には語彙レベルでのアクセントはないものの、フレーズレベルで首里平板型のアクセント句に似た特長を有するという点から、この方言が首里のような有アクセント方言の「崩壊」した形であるという議論が成り立つかもしれないが、それにはさらに多くのデータによる実証が必要であろう。またアクセント句の特徴を発話冒頭で示しながらアクセント自体は存在しないという伊良部島方言の事例は、フレーズ成分とアクセント成分をどのように融合させるかという、アクセントやイントネーションモデルの構築における極めて本質的な論点への貴重な資料ともなろうが、それについては稿を改めて触れたい。

4. モダリティ

4.1 疑問標識

ここでいう「モダリティ」とは「叙述、疑問、意思、行為要求」などを下位区分にもつ「表現類型のモダリティ」（日本語記述文法研究会編 2003）を指す。琉球方言のなかには首里のように文の法が動詞の活用形の一部として厳密に規定される方言があるが、これは本土方言にはない特徴である。首里方言では法接尾辞により、平叙文、通常疑問文、疑問詞疑問文、さらに係助詞を含む平叙文と疑問文が区別される（詳細は宮良 2000・91-169参照）。表1は伊良部島方言と首里方言における文末の疑問標識を比較したものである。下地 (2008b) は文末の形態素「ル」「ガ」を出現可能、つまりあってもなくても良いとするが、今回の被験者の発話でも疑問標識の使用には揺れがあった。対して首里方言ではこれらの形態素は動詞の構成要素として必ず存在し、終助詞のようにあってもなくてもよい、というものではない。また話者の発話にも揺れがない。

表1. 伊良部島方言と首里方言における疑問標識の対応

文の種類	伊良部島	首里
通常疑問文	ル（出現可能）	ミ
係助詞を含む通常疑問文	ル（出現可能）	ラ
疑問詞疑問文	ガ（出現可能）	ガ
係助詞を含む疑問詞疑問文	ガ（出現可能）	ラ

ここでは下地（2008b）の例文を中心に録音した資料から、モダリティのイントネーションを見てみたい。ただし、一部で下地の語彙や表現と異なる部分がある。

4.2 疑問文の特徴

伊良部島方言における平叙文とそれに対応する通常疑問文および疑問詞疑問文を比較すると、すべての疑問文に共通するのは文末の下降音調である。平叙文、希求形の「友人を呼ぼう」や命令形の「平良へ行って来い」ではわずかな下降、あるいはそのまま平らに終わる。この方言では「疑問」のモダリティはイントネーション句末にL%として付加することができる。ピッチの下降度には差異がみられるが、これは音節量や音素の構造により変化し、tarのような重音節ではその度合いが深まる。図1と2はそれぞれ「友人を呼んだ」「友人を呼んだの？」のイントネーションである。平叙文の「友人を呼んだ」では係助詞が「ドゥ」であるのに対し疑問文では「ル」である事に注意（係助詞については6.1節を参照）。文末表現は疑問標識なしの同一型が多くこの場合は、モダリティがイントネーションによって表現される事は自然でもあろう。しかし、疑問標識の「ル」が付加した例文でも文末は下降調をとっている（Appendix 例文13参照）。疑問文では文末に著しいピッチの下降が観察されるが平叙文では平らである。さらに両文を同一画面上で比較すると（図3）、両文がピッチの領域でも異なることが観察できる。疑問文（太線）は平叙文より高いピッチ領域で発話されている。さらに比較のため、首里方言の疑問文と平叙文を同一画面で比較したものが図4である。首里方言では平叙文と疑問文が法接尾辞で区別されるためモダリティを表す文末イントネーションが欠如しており、両文は基本的に同じイントネーション形状を示すが、ここでも疑問文は平叙文より高いピッチ領域で発話されている。首里方言では疑問の終助詞「ナー」を付加する場合は上昇調となり、また丁寧にたずねる時にも上昇調で発話される事があるが、疑問法を平叙文より下がるピッチの下降で表現するケースは観察されていない。

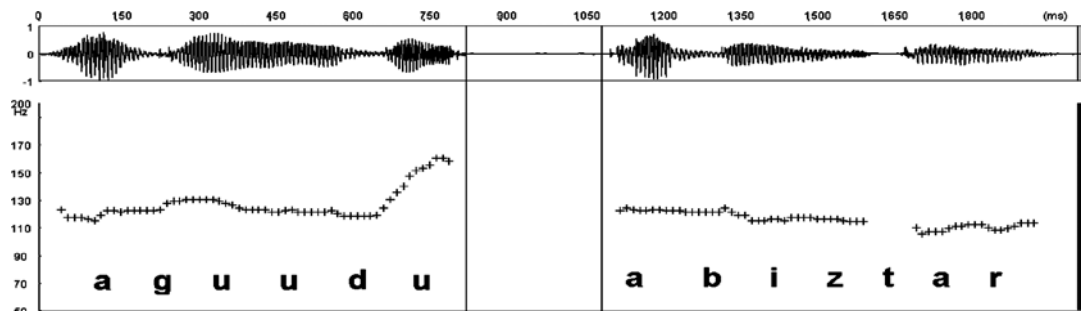


図1. 「アグードゥ (友人を) アビズタル (呼んだ)」。平叙文。

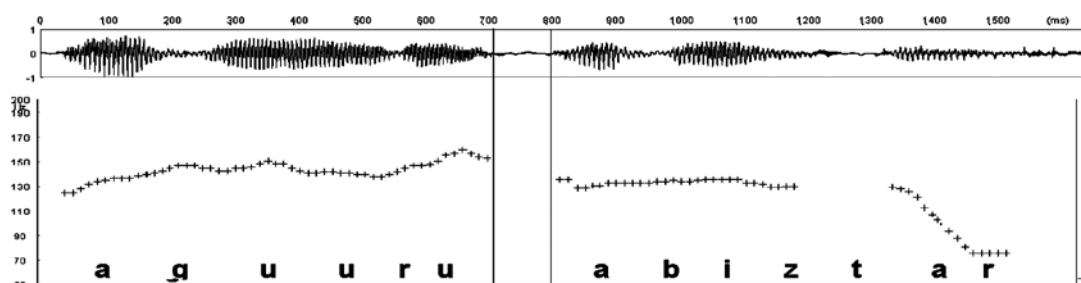


図2. 「アグール (友人を) アビズタル (呼んだの?)」疑問文。

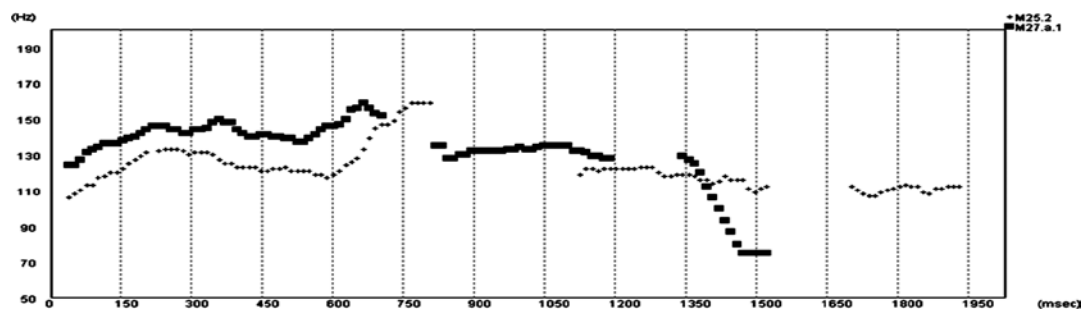


図3. 「友人を呼んだの?」疑問文 (太線) と「友人を呼んだ」平叙文の比較。伊良部島方言。

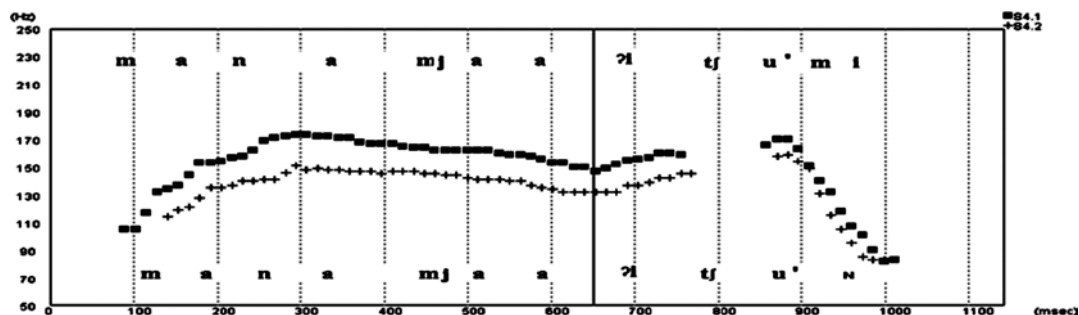


図4. 「真奈美は行くの?」疑問文(太線)と「真奈美は行く」平叙文の比較。首里方言。
時間軸は中立に操作してある。縦線は「真奈美は」(平板型アクセント)と「行く」(下降型アクセント)の境界。

平叙文と疑問文をイントネーションによって区別する言語は多い。250近くの言語について分析したBolinger (1978) は、その70%ほどが疑問文を文末の上昇音調によって区別し、残りの30%ほどが文末音調ではなくフレーズ全体のピッチの上昇で区別すると報告している。文末音調については、東京語の疑問文(通常疑問文、疑問視疑問文)が、疑問の終助詞の有無にかかわらず文末の上昇音調を伴うことが広く知られている。しかし日本語の方言間の中には、今回の伊良部島方言同様、疑問法がピッチの上昇ではなく「急激な下降」によって示される零石方言(上野 1993)、鹿児島や宮崎方言(窪園 2011)の事例も報告されている。また、第3のタイプとして法接尾辞の発達した首里方言のようにモダリティを現す文末音調が原則欠如している方言もある(永野マドセン 2010)。また従来は文末音調にのみ注目されてきたが、永野マドセン・鮎沢(2011)では東京語の疑問文において文中のフレーズ全体のピッチ値が有意に高いことが報告されており、首里方言でもこの特徴が観察されている。今回の伊良部島方言でも同様のパターンが観察されていることから、日本の方言では疑問文が文末音調とフレーズ全体の音調の上昇という両パラメーターで表現されている可能性が示唆された。以上、疑問文に関して東京、首里、および伊良部島方言のイントネーション形状を表2にまとめた。

表2. 疑問法を現す文法形態の有無とイントネーション形状

	東京 (有核アクセント)	首里 (有核アクセント)	伊良部島 (無アクセント)
文法形態	選択	必須	選択
文末音調	上昇	なし(上昇)*	下降
フレーズ全体の上昇	あり	あり	あり

*例外的なケースでは上昇

5. 統語構造（左枝分かれと右枝分かれ）

本稿では、本土方言について調査した前川（1990）とほぼ同一項目である「次郎が読むと眠たくなる」と「次郎は飲むと眠たくなる」および「青い壁の家が見える」と「青い小さな家が見える」の差異について考察する。「次郎が読むと」では、格助詞「が」でマークされた「次郎」はうめこみ文の述語「読む」の主格になるが、主文の述語「眠たくなる」の主格とならないのに対して、「次郎は」の文では「は」でマークされた「次郎」は直後の述語「飲む」だけではなく、主文の述語「眠たくなる」の主格となる。「青い壁の家」では形容詞「青い」が「壁」を修飾し、さらに「青い壁の」が「家」を修飾しているが、「青い小さな家」では「青い」も「小さな」もともに「家」を修飾する。このような修飾構造の違いが本土方言の先行研究においてイントネーションに反映される事が知られている。

5.1 「次郎は飲むと眠たくなる」と「次郎が読むと眠たくなる」

この両文は以下のように、左枝分かれと右枝分かれの統語構造を持つ。

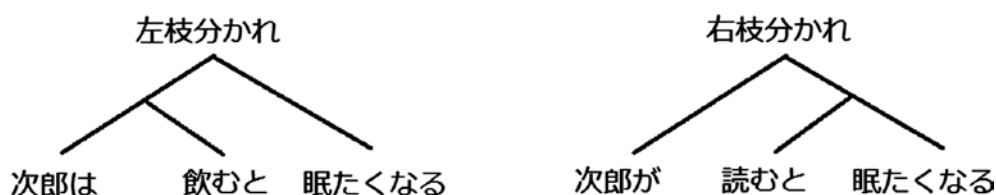


図5と6は「ジローヤ ヌンケガ ネウタフドナル（次郎は飲むと眠たくなる）」と「ジローガ ヌンケガ ネウタフドナル（次郎が読むと眠たくなる）」のイントネーションを比較したものである。左枝分かれ構造からなる「次郎は」の文では、発話冒頭に大きなピッチの上昇があるが、それと同等あるいはそれを超えるピッチの山はなく、この文が三つのアクセント句を含む単一のイントネーション句として発話されていることがわかる。対して図8では「次郎が読むと」と「眠たくなる」の両フレーズの冒頭で大きなピッチの上昇があり、この文が二つのイントネーション句によって発話され、前者はさらに「次郎が」と「読むと」という二つのアクセント句を含むことがわかる。また「次郎は」のあとでは長いポーズが挿入されているが、「次郎が」のあとではポーズは挿入されない。さらに「次郎が」では「次郎が」のフレーズが「次郎は」よりも高く発話されていることから「次郎」に焦点が置かれているという解釈もできるので、この両文の差異は助詞「は」と「が」の違いによるものかもしれない。前川（1990）はこの調査項目については無題文「次郎が」と有題文「次郎は」の差異および左・右枝分かれ構造の差異など複雑な差異が認められるため、イントネーション形状の決定要因を限定するには慎重な調査が必要と述べている。

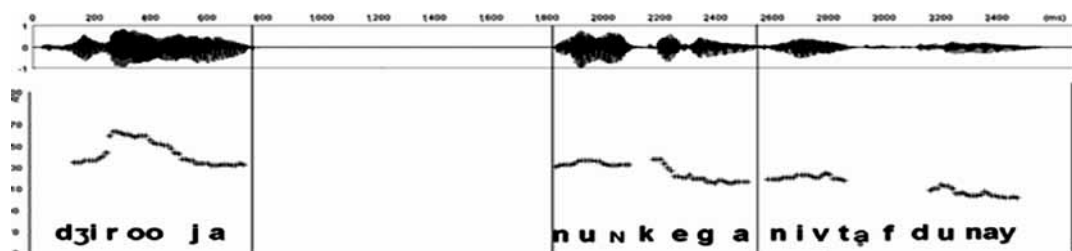


図5. 「ジローヤ ヌンケガ ニイブタフドゥナイ (次郎は飲むと眠たくなる)」のイントネーション。

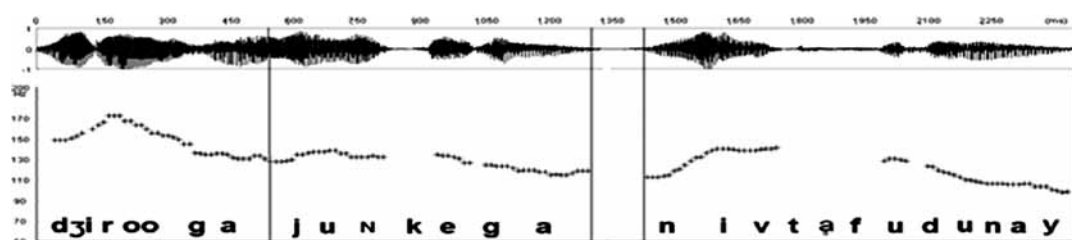
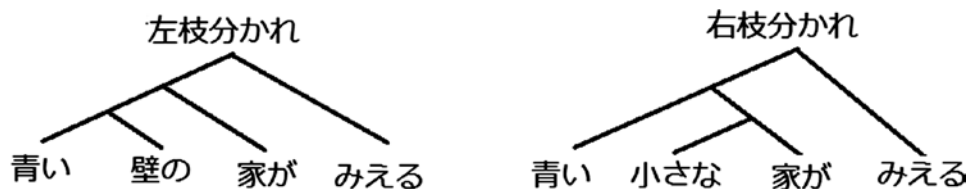


図6. 「ジローガ ヌンケガ ニイブタフドゥナイ (次郎が読むと眠たくなる)」のイントネーション。

5.2 「青い壁の家がみえる」と「青い小さな家がみえる」

この両文は左枝分かれ構造のみからなる「オーオーヌ クビーヌ ヤースドゥ ミーライ (青い壁の家が見える)」と名詞句のなかに右枝分かれを含む「オーオーヌ イミイミ ガイヌ ヤースドゥ ミーライ (青い小さな家が見える)」という異なる統語構造をもつ。両文のイントネーションを図7と8に示す。



「青い壁の家」という名詞句は「オーオーヌ (青い)」「クビーヌヤースドゥ (壁の家が)」「ミーライ (見える)」の三つのアクセント句を含み、それぞれのアクセント句の冒頭にピッチの上昇があるが「青い」においてそれが最大で、それ以降はなだらかに降下して文全体でひとつのイントネーション句を形成している (図7参照)。

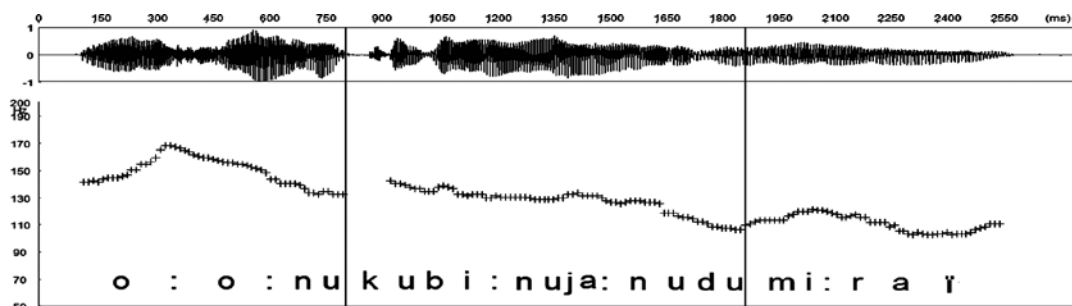


図7. 左枝分かれ構文「オーオース クビヌヤヌドゥ ミーライ（青い壁の家がみえる）」のイントネーション。（注；太字のイはïに対応する）

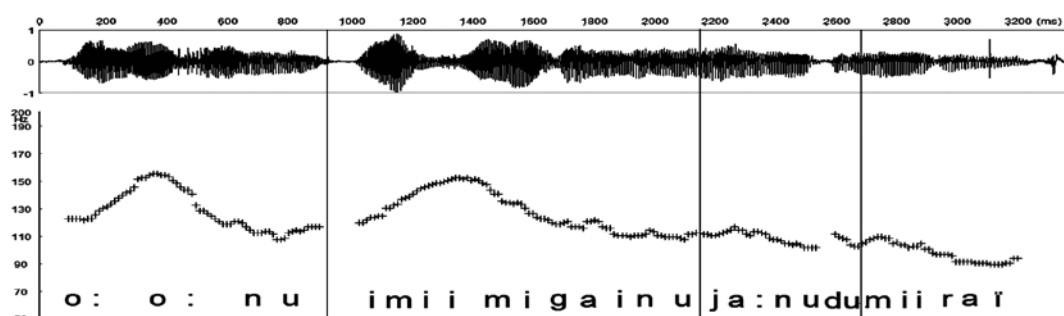


図8. 右枝分かれを名詞句の中に含む「オーオース イミイミガイヌ ヤヌドゥ ミーライ（青い小さな家がみえる）」のイントネーション。

これに対し図8の「オーオース イミイミガイヌ ヤヌドゥ ミーライ（青い小さな家が見える）」では、発話冒頭の「オーオース（青い）」とそれに続く「イミイミガイヌ ヤヌドゥ ミーライ（小さな家が見える）」の冒頭との二つに大きなピッチの山があり、この発話が二つのイントネーション句から構成されることが観察される。「オーオース」と「イミイミガイヌ」の間には右枝分かれの統語境界があるがKubozono（1987）の指摘するような右枝分かれ構造の特徴であるピッチの上昇（ブースト）がこの方言でも観察される。このことから、左・右枝分かれ構造の差異が、語彙レベルのアクセントのない伊良部島方言でもピッチブーストによるイントネーション境界の有無として発話で区別されていることがわかる。

伊良部島と同じく無アクセント方言である福井、熊本に関しての調査でも同様の同様の結果が報告されており（前川 1990）、統語構造の差異がイントネーションに反映し、ピッチのリセットによるイントネーション句の数として区別できるという一般化はできるが、福井、熊本、伊良部島方言それぞれに基本イントネーション単位の形状が異なることは3節で指摘した。なお有核アクセントの首里方言のイントネーションでも統語構造の差異が

イントネーションに反映される事が報告されている（Nagano-Madsen 2011）。

6. フォーカス

文のイントネーションを規定する要因のひとつとして、フォーカスがある事は先行研究によりよく知られており、日本語についてもいくつかの先行研究がある（例えば、郡 1989）。フォーカス構文におけるイントネーションの特徴として、フォーカスの置かれる語やフレーズのF0が高められ、それに続く部分のF0は低く抑えられるイントネーション形状を示すことが知られている。伊良部島方言でも首里方言でも、フォーカスの置かれる句には係助詞が付く。この章では首里方言との比較も交えつつ、伊良部島方言のフォーカスイントネーションの特徴を考察する。

6.1 係助詞によるフォーカス

伊良部方言には他の多くの琉球方言のよう係助詞があり、フォーカスの置かれる語や句には文のタイプに応じて以下の係助詞が付加されるが、表3は伊良部島方言と首里方言の係助詞をその生起環境によって分類したものである。伊良部島については下地（2008b）の記述に基づく。首里方言の平叙文では「ドゥ」か「ル」が現れるが両者は同一形態素の音声的バリエーションであり、「ドゥ」のほうが古い形である。反して伊良部島方言の「ドゥ」と「ル」は機能の異なる別の形態素である。

表3. 伊良部島方言と首里方言にみる係助詞の対応

文の種類	伊良部島	首里
平叙文	ドゥ	ドゥ・ル
通常疑問文	ル	ガ
疑問詞疑問文	ガ	ガ

琉球方言には広く係り結びの文法形態がみられるが、その本質については議論もある（狩俣 2011）。下地（2008b）は先島方言（宮古・八重山・与那国）において「係りの弱まり」が目立つという内間（1985）の記述に触れつつ、伊良部島方言の結び形式が「m語尾終止形で結べないこと」であり、「排除型の係り結び」であると位置づけている。

ここでは「マナミヤー バスカードゥ ナハンカイヤ イフ（真奈美はバスで那覇へ行く）」という文を基本に、「誰が那覇へバスで行ったの？」「真奈美は那覇へ何で行ったの？」「真奈美はバスでどこへ行ったの？」という設問に問いに対して得られた発話を分析した。それぞれ「マナミガドゥ（真奈美が）」「バスカードゥ（バスで）」「ナハンカイドゥ（那覇へ）」に焦点が置かれた発話となっている。これらの句には係助詞「ドゥ」が付加されているが、

伊良部島方言のフォーカスの実現で最も規則的なのは、この句末の係助詞が卓立のイントネーションとして文中最も高いピッチ値で発話されている事である。加えてフォーカスの置かれる句のあとには、ポーズが挿入される傾向が強い。中立文でも「バスカー（バスで）」に係助詞「ドゥ」が付いているが、ここでは卓立のイントネーションでは発話されていない。

比較のため、首里方言における類似文のイントネーションを図13, 14, 15に提示した。図13は中立文の「マナミヤー ナーフアンカイ イチュン（真奈美は那覇へ行く）」、図14は「マナミガル ナーフアンカイ イチュル（真奈美が那覇へ行く）」、図15は「メーアサマナミヤー バスシル ナーフアンカイ イチュル（毎朝、真奈美は、バスで那覇へ行く）」である。「真奈美が」にフォーカスのある発話では句末に係助詞「ル」が付加し「マナミガル」となるが、これに呼応して動詞の法接尾辞も直接叙実法の「ン」で終わる「イチュン」（中立文）から係り結びの叙実法の「ル」で結ぶ「イチュル」と変化している。同様に「バスで」にフォーカスのある発話では「バスシ（バスで）」に係助詞「ル」が付加し「バスシル」となり、文末はやはり「ル」で呼応して「イチュル」となる。

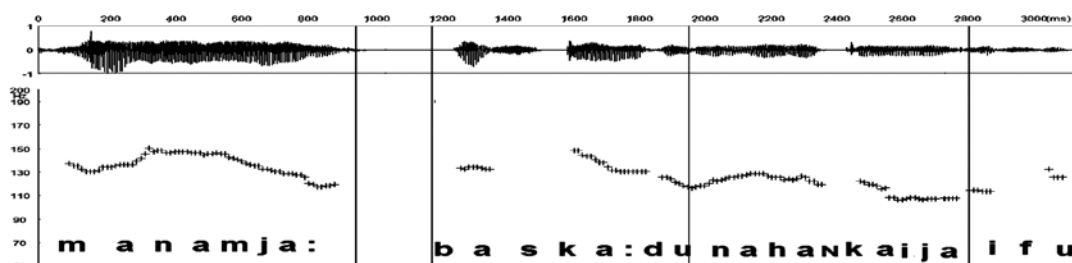


図9. 伊良部島方言。真奈美はバスで那覇へ行く（中立文）

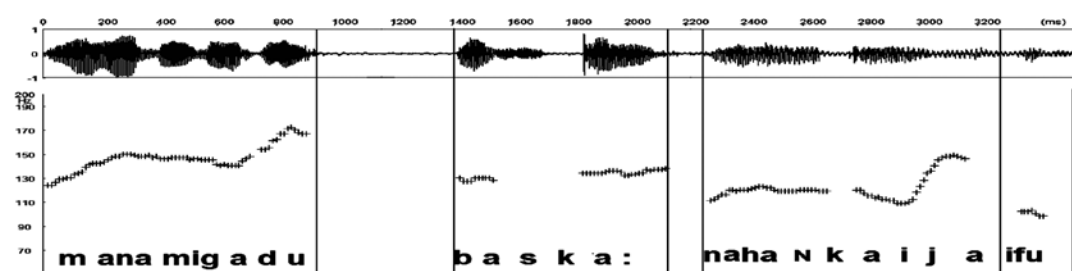


図10. 伊良部島方言。真奈美がバスで那覇へ行く。

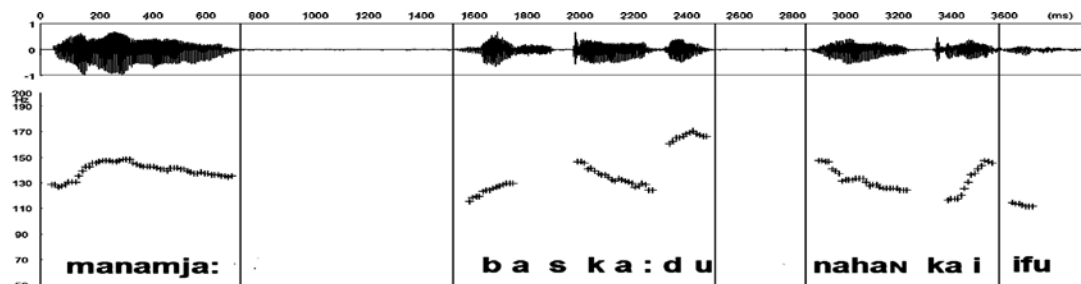


図11. 伊良部島方言。真奈美はバスで那覇へ行く。

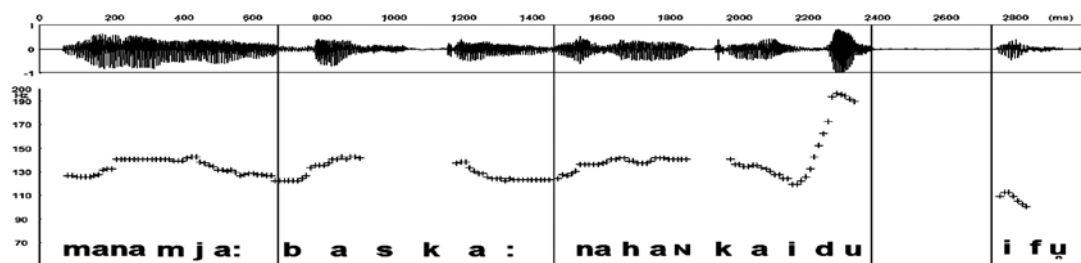


図12. 伊良部島方言。真奈美はバスで那覇へ行く。

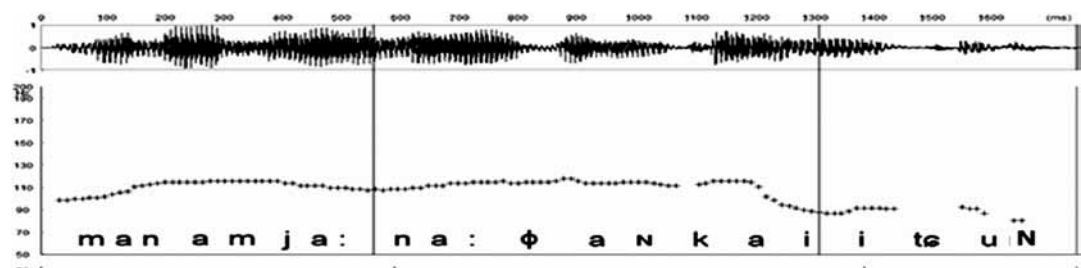


図13. 首里方言。真奈美は那覇へ行く（中立文）。

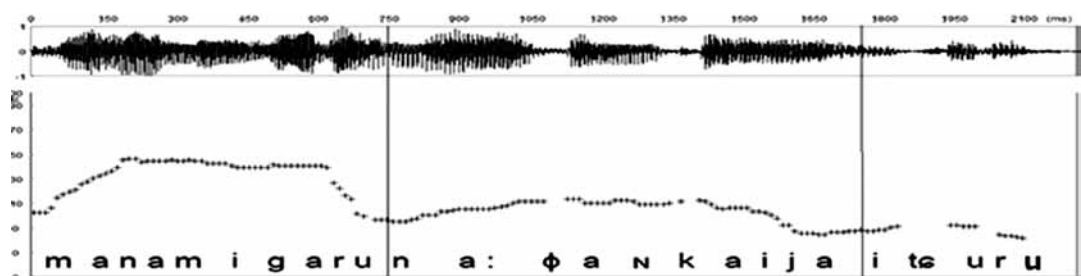


図14. 首里方言。真奈美が那覇へ行く。

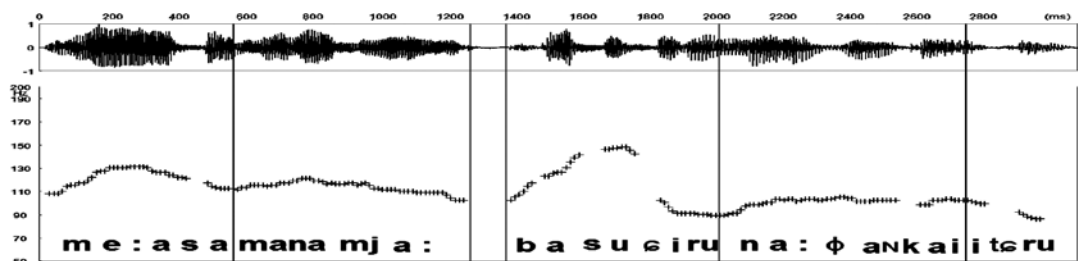


図15. 首里方言。毎朝、真奈美はバスで那覇へ行く。

首里方言と伊良部島方言の違いのひとつは、前者では係助詞が必ず低く付き卓立のイントネーションで発話される事がないのに対し後者では、フォーカス実現の係助詞は卓立イントネーションとして文中で最も高いピッチ値として発話される事である。「真奈美が」は首里方言で平板型アクセントであるが「ル」が低く付きHHHHLとなる。首里方言の中立文では発話冒頭の「真奈美」がこの話者の場合115Hz前後で始まるのに対し、「真奈美」にフォーカスが置かれた発話ではその値が150Hz前後に増大し、その後の「那覇に行くの？」が低く抑えられている。これは東京語をはじめとして、他の多くの言語や方言で見られる典型的なフォーカス構文のイントネーションである。反して、伊良部方言では、中立文でも、フォーカスの異なる文でも発話冒頭の「真奈美」は150Hz前後で変化せず、フォーカスの置かれるフレーズ末に付加された係助詞のみが高く発話されその後にポーズが挿入されている。フォーカスに続くアクセント句は少しピッチ値が下がるが、これはこの方言のイントネーションの基本形状が「へ」の字形でもともとデクリネーションを含むからであろう。

7. まとめ

語彙レベルでのアクセントのない伊良部島方言でも、モダリティ、統語構造、フォーカスなどの情報が規則的にイントネーションに反映されている事が明らかにされた。伊良部島方言のイントネーションは「へ」の字型のアクセント句を基本単位とし、その上層単位としてイントネーション句を認める。モダリティはイントネーション句の右端に現れ、疑問法は文法形式の有無にかかわらず急激なピッチの下降によって示される。左枝、右枝分かれの統語構造はイントネーション句の数の違いとして、またフォーカスはアクセント句末に付加される係助詞が卓立のイントネーションで発話される事によって表される。係助詞のない発話でもフレーズ末の拍が高くなることのできる、場合によっては冒頭から上昇を続けることがあり、この場合は典型的な「へ」の字型にならない。今回調査された伊良部島の無アクセント方言と、本土の無アクセント方言である福井、熊本両方言の間には、共通点同様差異も観察される。まず共通点であるが、いずれの無アクセント方言も基本となるイントネーション単位があり、局所的な卓立のイントネーションを使う（前川 1990、

1992)。差異としては、基本となるイントネーション単位の形状が方言間で異なることである。無アクセント方言における先行研究は、統語構造との関連についてのものが多く、一つの無アクセント方言についてモダリティやフォーカスなども含めた包括的な研究がまだ少ない。本稿も話者数という点では満足のゆくものではなく、調査項目も限られているため、今後さらなる研究を続けてゆく必要がある。今回の分析はまた、イントネーションのモデルにおけるアクセント要素とフレーズ要素の役割について、アクセント句の冒頭のピッチパタンの特徴がアクセント変遷を推論する上で関係してくるか、など日本語のアクセントとイントネーションを論じる上で興味深いテーマも示唆した。

謝辞

本稿で使用された録音の主なものは筆者が博報財団の招聘フェローとして国立国語研究所に滞在中に行われたものである。二度に渡る録音調査にご協力くださった被験者のT氏にお礼申し上げたい。また本稿の執筆に当たっては細部まで丁寧に御指摘くださった査読者に感謝したい。ただし筆者が海外在住という事で、情報の確認が難しく加筆できなかった部分もある事をご了承願いたい。

参考文献

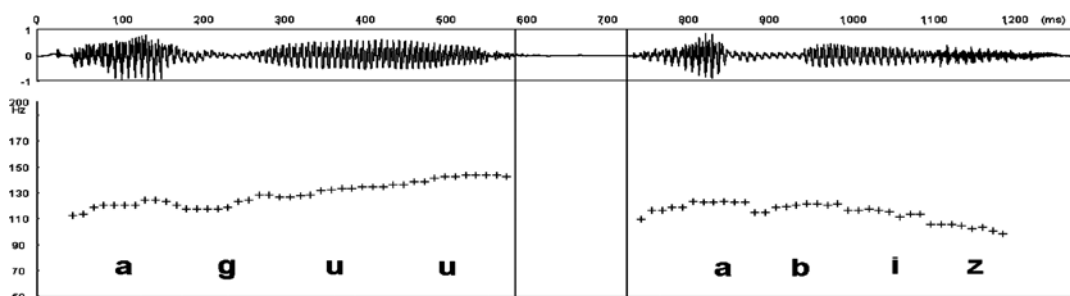
- Kubozono, Haruo (1993) *The Organization of Japanese Prosody*. Kuroshio Publication.
- Shimozi, Michinori (2008a) *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. Unpublished PhD thesis, Australian National University.
- Pierrehumbert Janet and Mary E. Beckman (1988) *Japanese Tone Structure*. Cambridge: MIT Press.
- Venditti, Jennifer J. (2005) The J ToBI model of Japanese intonation. Jun, Sun-Ah (ed.) *Prosodic Typology: The Phonology of Intonation and Phrasing*. Oxford University Press, 172-200.
- 上野善道 (1993)「日本語の方言アクセントとイントネーション」第7回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『国際化する日本語話し言葉の科学と音声教育』44-62、クバプロ
- 狩俣繁久 (2011)「琉球方言の焦点化助辞と文の通達的なタイプ」『日本語の研究』第7巻4号、69-82、日本語学会
- 窪園晴夫 (2011)「アクセントとイントネーション」『ことばの類型と多様性』11-16、人間文化研究機構
- 郡史郎 (1989)「強調とイントネーション」『講座日本語と日本語教育2—日本語の音声音韻(上)』316-342、明治書院

- 下地理則 (2008b) 「南琉球宮古伊良部島方言の係り結び—共時的な記述」『琉球の方言』 33号、87-98、法政大学沖縄文化研究所
- 中本正智編『日本列島のイントネーション資料—琉球列島の部』1992、日本語音声の韻律的特長の生理学的機制及び語音の音響的特長との相互関係の研究 課題番号03208105
- 永野マドセン泰子 (2010) 「首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション」『琉球の方言』 35号、1-16、法政大学沖縄文化研究所
- 永野マドセン泰子・鮎澤孝子 (2011) 「日本語の感情表現とイントネーション」『音声文法』 1、くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 モダリティ』 くろしお出版
- 平山輝男 (1964) 「琉球宮古方言の研究」『国語学』 56 : 61-73
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966) 『琉球方言の総合的研究』 明治書院
- 藤崎博也・須藤寛 (1971) 「日本語単語アクセントの基本周波数パターンとその生成機構のモデル」『日本音響学会誌』 34巻、167-176
- 前川喜久雄 (1990) 「無アクセント方言のイントネーション」『音声言語IV』 87-110
- 前川喜久雄 (1992) 「熊本無アクセント方言のイントネーション」『月刊言語』 66-74
- 宮良信詳 (2000) 『うちなーぐち講座、首里ことばのしくみ』、オキナワタイムス社

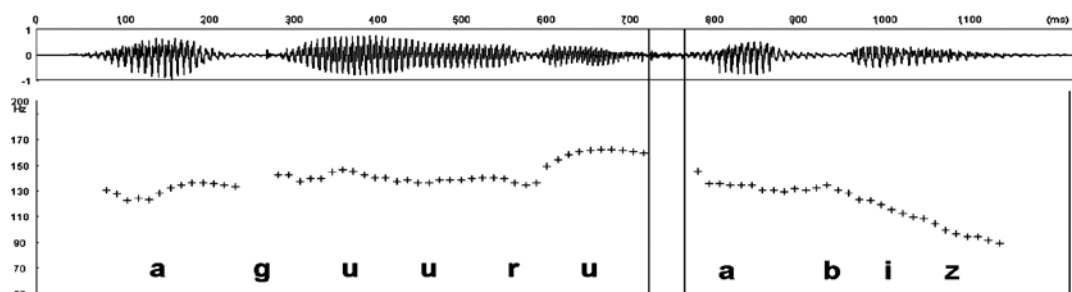
APPENDIX 「イントネーション資料」モダリティ

1. 友人を呼ぶ（平叙文・現在）
2. 友人を呼ぶの？（通常疑問文・現在）
3. 友人を呼んだ（平叙文・過去）（本文中図1 参照・ここでは省略）
4. 友人を呼んだの？（通常疑問文・過去）（本文中図2 参照・ここでは省略）
5. 友人を呼ぼう（意思）
6. 友人を呼ぶつもりなの？（通常疑問文・意思）
7. 友人を呼びたいなあ！（希求）
8. 誰を呼ぶの？（疑問詞疑問文）
9. 平良へ行ってきた（平叙文・過去）
10. 平良へ行ってきたの？（通常疑問文・過去）
11. 平良へ行って来い（命令）
12. どこへ行ってきたの？（疑問詞疑問文）
13. お前は行くのか？（通常疑問文）
14. それは魚だったのか？（通常疑問文・過去）

1. 友人を呼ぶ（平叙文・現在）

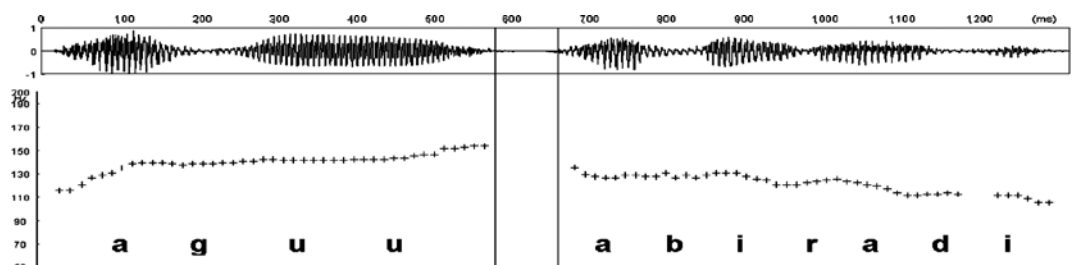


2. 友人を呼ぶの？（疑問文・現在）

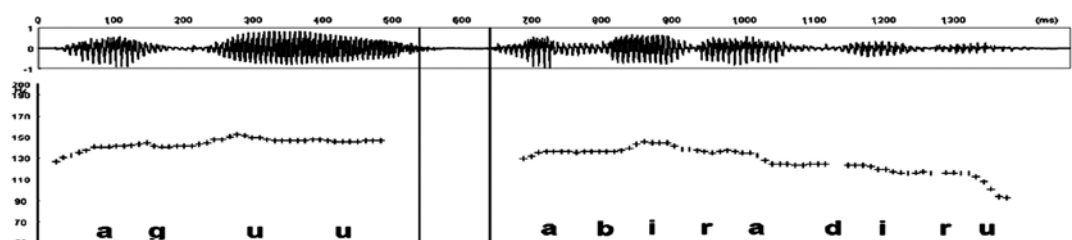


3, 4は本文中にあるので省略

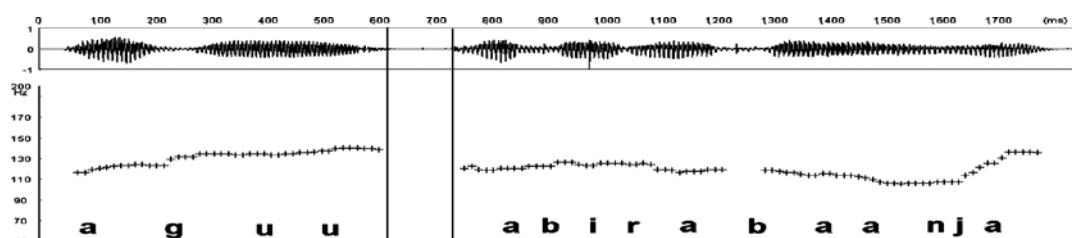
5. 友人を呼ぼう（希求推量形・意思）



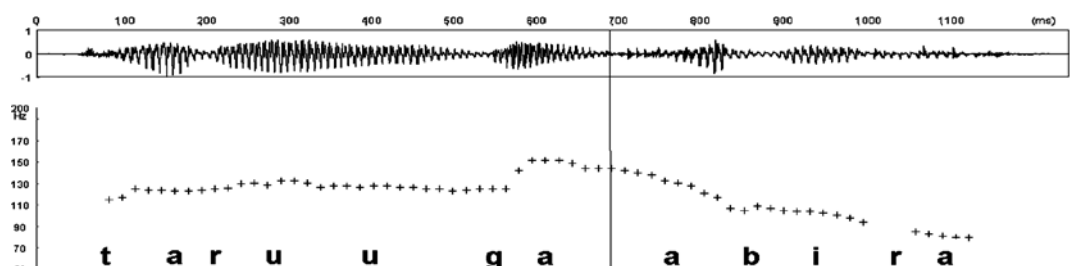
6. 友人を呼ぶつもりなの？（通常疑問文・意思）



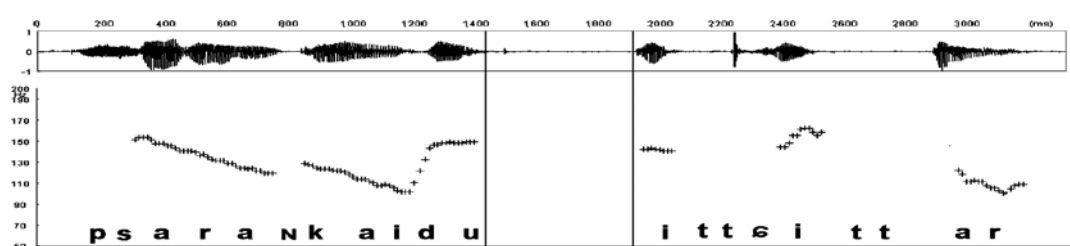
7. 友人を呼びたいなあ！（希求）



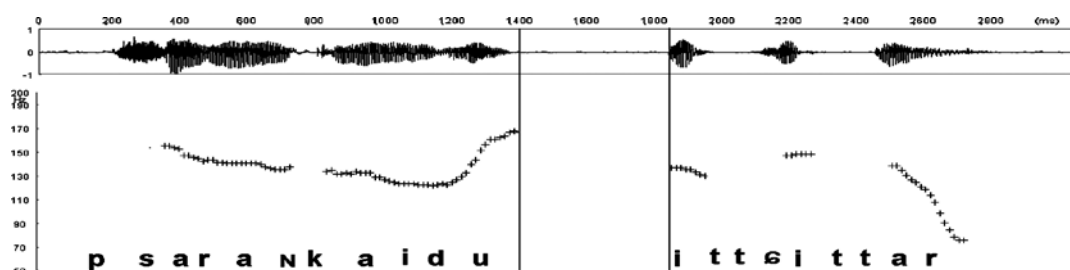
8. 誰を呼ぶの？（疑問詞疑問文）



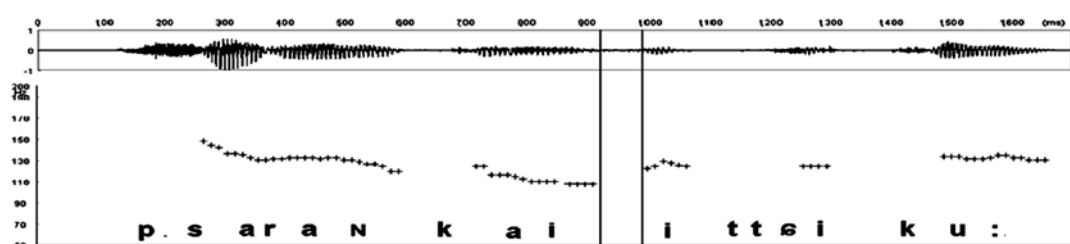
9. 平良へ行ってきた（平叙文・過去）



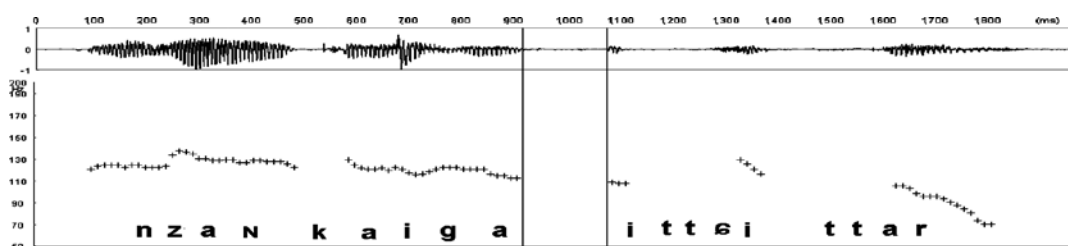
10. 平良へ行ってきたの？（通常疑問文・過去）



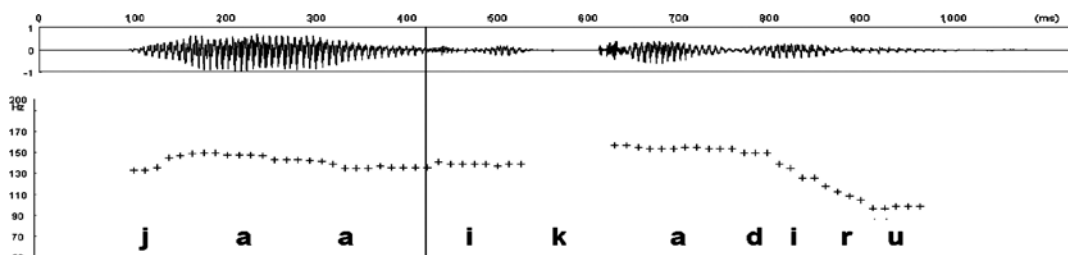
11. 平良へ行ってこい（命令文）



12. どこへ行ってきたの？（疑問詞疑問文）



13. お前は行くのか？（通常疑問文）



14. それは魚だったのか？（通常疑問文・過去）

